おくのほそ道（松尾芭蕉）

01　発端

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。

舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらえて老を迎ふるものは、日々旅にして旅を栖とす。

古人も多く旅に死せるあり。

予もいづれの年よりか、片雲の風に誘はれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへ、去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巣を払ひて、やや年も暮、春立てる霞の空に白河の関越えんと、そぞろ神のものにつきて心を狂はせ、道祖神の招きにあひて、取るもの手につかず。

股引の破れをつづり、笠の緒付けかえて、三里に灸すゆるより、松島の月まず心にかかりて、住めるかたは人に譲り、杉風が別墅に移るに、

草の戸も　住み替はる代ぞ　雛の家

面八句を庵の柱に掛け置く。

02　旅立ち

弥生も末の七日、あけぼのの空朧々として、月は有明にて光をさまれるものから、富士の嶺幽かに見えて、上野・谷中の花の梢、またいつかはと心細し。

むつまじき限りは宵よりつどひて、舟に乗りて送る。

千住といふ所にて舟を上がれば、前途三千里の思い胸にふさがりて、幻の巷に離別の涙をそそぐ。

行く春や　鳥啼き魚の　目は泪

これを矢立の初として、行く道なを進まず。

人々は途中に立ち並びて、後影の見ゆるまではと見送るなるべし。

03　第一夜

ことし元禄二年にや、奥羽長途の行脚ただかりそめに思ひ立ちて、呉天に白髪の憾みを重ぬといへども、耳に触れていまだ目に見ぬ境、もし生て帰らばと、定なき頼みの末をかけ、その日ようよう早加といふ宿にたどり着きにけり。

痩骨の肩にかかれる物、まず苦しむ。

ただ身すがらにと出で立ちはべるを、紙子一衣は夜の防ぎ、浴衣・雨具・墨筆のたぐひ、あるはさりがたき餞などしたるは、さすがにうち捨がたくて、頭次の煩となれるこそわりなけれ。

04　室の八島

室の八嶋に詣す。

同行曽良がいはく、「この神は木の花咲耶姫の神と申して富士一体なり。

無戸室に入りて焼きたまふ誓ひの御中に、火火出見の尊生れたまひしより室の八嶋と申す。

また煙をよみならはしはべるもこのいはれなり」。

はた、このしろといふ魚を禁ず。

縁記の旨世に伝ふこともはべりし。

05　日光

三十日、日光山の麓に泊る。

あるじのいひけるやう、「わが名を仏五左衛門といふ。よろず正直を旨とするゆゑに、人かくは申しはべるまま、一夜の草の枕もうち解けて休みたまへ」といふ。

いかなる仏の濁世塵土に示現して、かかる桑門の乞食順礼ごときの人を助けたまふにやと、あるじのなすことに心をとどめて見るに、ただ無智無分別にして、正直偏固の者なり。剛毅木訥の仁に近きたぐひ、気禀の清質もっとも尊ぶべし。

卯月朔日、御山に詣拝す。

往昔この御山を「二荒山」と書きしを、空海大師開基の時、「日光」と改めたまふ。

千歳未来を悟りたまふにや。

今この御光一天にかかやきて、恩沢八荒にあふれ、四民安堵の栖穏やかなり。

なほ憚多くて筆をさし置きぬ。

あらたふと　青葉若葉の　日の光

黒髪山は霞かかりて、雪いまだ白し。

剃り捨てて　黒髪山に　衣更　曽良

曽良は河合氏にして、惣五郎といへり。

芭蕉の下葉に軒を並べて、予が薪水の労を助く。

このたび松島・象潟の眺ともにせんことを喜び、かつは羈旅の難をいたはらんと、旅立つ暁髪を剃りて墨染にさまを変へ、惣五を改て宗悟とす。

よって黒髪山の句あり。

「衣更」の二字力ありて聞こゆ。

二十余町山を登つて滝あり。

岩洞の頂より飛流して百尺、千岩の碧潭に落ちたり。

岩窟に身をひそめ入りて滝の裏より見れば、裏見の滝と申し伝へはべるなり。

しばらくは　滝にこもるや　夏の初め

06　那須野

那須の黒羽といふ所に知る人あれば、これより野越にかかりて、直道を行かんとす。

遥に一村を見かけて行くに、雨降り日暮るる。

農夫の家に一夜を借りて、明ればまた野中を行く。

そこに野飼ひの馬あり。

草刈る男に嘆き寄れば、野夫といへどもさすがに情知らぬにはあらず。

「いかがすべきや。されどもこの野は縦横に分かれて、うひうひしき旅人の道踏みたがへん、あやしうはべれば、この馬のとどまる所にて馬を返したまへ」と、貸しはべりぬ。

小さき者ふたり、馬の跡慕ひて走る。

ひとりは小姫にて、名を「かさね」といふ。

聞きなれぬ名のやさしかりければ、

かさねとは　八重撫子の　名なるべし　曽良

やがて人里に至れば、価を鞍壺に結び付けて、馬を返しぬ。

07　黒羽

黒羽の館代浄坊寺何某のかたにおとずる。

思ひかけぬあるじの喜び、日夜語り続けて、その弟桃翠などいふが、朝夕勤め訪ひ、自らの家にも伴ひて、親属のかたにも招かれ、日を経ままに、一日郊外に逍遙して、犬追物の跡を一見し、那須の篠原を分けて玉藻の前の古墳を訪ふ。

それより八幡宮に詣す。

与一扇の的を射し時、「別してはわが国の氏神正八幡」と誓ひしもこの神社にてはべると聞けば、感應殊にしきりにおぼえらる。

暮るれば桃翠宅に帰る。

修験光明寺といふあり。

そこに招かれて行者堂を拝す。

夏山に　足駄を拝む　首途かな

08　雲巌寺

当国雲巌寺の奥に佛頂和尚山居跡あり。

竪横の　五尺にたらぬ　草の庵
　　結ぶもくやし　雨なかりせば

と、松の炭して岩に書き付けはべりと、いつぞや聞こえたまふ。

その跡見んと雲岸寺に杖を曳けば、人々進んでともにいざなひ、若き人多く、道のほどうち騒ぎて、おぼえずかの麓に到る。

山は奥ある気色にて、谷道遙かに、松・杉黒く、苔しただりて、卯月の天今なほ寒し。

十景尽くる所、橋を渡つて山門に入る。

さて、かの跡はいづくのほどにやと、後ろの山によぢ登れば、石上の小庵岩窟に結び掛けたり。

妙禅師の死関、法雲法師の石室を見るがごとし。

木啄も　庵は破らず　夏木立

と、とりあへぬ一句を柱に残しはべりし。

09　殺生石・遊行柳

これより殺生石に行く。

館代より馬にて送らる。

この口付きの男、「短冊得させよ」と乞ふ。

やさしきことを望みはべるものかなと、

野を横に　馬引き向けよ　ほととぎす

殺生石は温泉の出づる山陰にあり。

石の毒気いまだ滅びず。

蜂・蝶のたぐひ真砂の色の見えぬほど重なり死す。

また、清水流るるの柳は蘆野の里にありて田の畔に残る。

この所の郡守戸部某の「この柳見せばや」など、をりをりにのたまひ聞こえたまふを、いづくのほどにやと思ひしを、今日この柳の蔭にこそ立ち寄りはべりつれ。

田一枚　植ゑて立ち去る　柳かな

10　白河の関

心もとなき日数重なるままに、白河の関にかかりて、旅心定まりぬ。

「いかで都へ」と便り求めしもことわりなり。

中にもこの関は三関の一にして、風騒の人、心をとどむ。

秋風を耳に残し、紅葉を俤にして、青葉の梢なほあはれなり。

卯の花の白妙に、茨の花の咲き添ひて、雪にも越ゆる心地ぞする。

古人冠を正し、衣装を改めしことなど、清輔の筆にもとどめ置かれしとぞ。

卯の花を　かざしに関の　晴れ着かな　曽良

11　須賀川

とかくして越え行くままに、阿武隈川を渡る。

左に会津根高く、右に岩城・相馬・三春の庄、常陸・下野の地をさかひて、山連なる。

影沼といふ所を行くに、今日は空曇て物影映らず。

須賀川の駅に等窮といふ者を尋ねて、四五日とどめらる。

まず「白河の関いかに越えつるや」と問う。

「長途のくるしみ、身心疲れ、かつは風景に魂奪はれ、懐旧に腸を断ちて、はかばかしう思ひめぐらさず。

風流の　初めや奥の　田植歌

むげに越えんもさすがに」と語れば、脇・第三と続けて、三巻となしぬ。

　この宿のかたわらに、大きなる栗の木陰を頼みて、世をいとふ僧あり。

橡拾ふ太山もかくやと閑かにおぼえられて、ものに書き付はべる。

その詞、

栗といふ文字は西の木と書きて
西方浄土に便ありと、行基菩薩の一生
杖にも柱にもこの木を用ゐたまふとかや。

世の人の　見付けぬ花や　軒の栗

12　浅香山・信夫の里

等窮が宅を出でて五里ばかり、桧皮の宿を離れて浅香山あり。路より近し。

このあたり沼多し。

かつみ刈るころもやや近うなれば、いづれの草を花がつみとはいふぞと、人々に尋ねはべれども、さらに知る人なし。

沼を尋ね、人に問ひ、「かつみかつみ」と尋ね歩きて、日は山の端にかかりぬ。

二本松より右に切れて、黒塚の岩屋一見し、福島に宿る。

明くれば、しのぶもぢ摺の石を尋ねて、信夫の里に行く。

遥か山陰の小里に石半ば土に埋もれてあり。

里のわらべの来りて教へける。

「昔はこの山の上にはべりしを、往来の人の麦草を荒らして、この石を試みはべるを憎みて、この谷に突き落とせば、石の面下ざまに伏したり」といふ。

さもあるべきことにや。

早苗とる　手もとや昔　しのぶ摺

13　飯塚の里

月の輪の渡しを超えて、瀬の上といふ宿に出づ。

佐藤庄司が旧跡は、左の山際一里半ばかりにあり。

飯塚の里鯖野と聞きて尋ねたずね行くに、丸山といふに尋ねあたる。

これ、庄司が旧館なり。

麓に大手の跡など、人の教ふるにまかせて涙を落とし、またかたはらの古寺に一家の石碑を残す。

中にも、ふたりの嫁がしるし、まずあはれなり。

女なれども、かひがひしき名の、世に聞こえつるものかなと、袂をぬらしぬ。

堕涙の石碑も遠きにあらず。

寺に入りて茶を乞へば、ここに義経の太刀・弁慶が笈をとどめて什物とす。

笈も太刀も　五月に飾れ　紙幟

五月朔日のことなり。

その夜飯塚に泊まる。

温泉あれば湯に入りて宿を借るに、土坐に筵を敷て、あやしき貧家なり。

灯もなければ、囲炉裏の火かげに寝所を設けて臥す。

夜に入りて雷鳴り、雨しきりに降て、臥る上より漏り、蚤・蚊にせせられて眠らず。

持病さへおこりて、消え入るばかりになん。

短夜の空もやうやう明くれば、また旅立ちぬ。

なお、夜のなごり心進まず、馬借りて桑折の駅に出づる。

遥なる行末をかかへて、かかる病おぼつかなしといへど、羇旅辺土の行脚、捨身無常の観念、道路に死なん、これ天の命なりと、気力いささかとり直し、路縦横に踏で伊達の大木戸を越す。

14　笠島

鐙摺・白石の城を過、笠島の郡に入れば、藤中将実方の塚はいづくのほどならんと人に問へば、「これより遥か右に見ゆる山際の里を蓑輪・笠島といひ、道祖神の社・形見の薄今にあり」と教ゆ。

このごろの五月雨に道いとあしく、身疲れはべれば、よそながら眺やりて過るに、蓑輪・笠島も五月雨のをりに触れたりと、

笠島は　いづこ五月の　ぬかり道

15　武隈の松

岩沼に宿る

武隈の松にこそ、目さむる心地はすれ。

根は土際より二木に分かれて、昔の姿失なはずと知らる。

まず能因法師思ひ出づ。

往昔陸奥守にて下りし人、この木を伐て、名取川の橋杭にせられたることなどあればにや、「松はこのたび跡もなし」とはよみたり。

代々、あるは伐、あるいは植ゑ継ぎなどせしと聞くに、今はた、千歳の形整ほひて、めでたき松の気色になんはべりし。

武隈の松見せ申せ遅桜

と挙白といふ者の餞別したりければ、

桜より　松は二木を　三月越し

16　宮城野

名取川を渡て仙台に入る。

あやめ葺く日なり。

旅宿を求めて四五日逗留す。

ここに画工加右衛門といふ者あり。

いささか心ある者と聞きて知る人になる。

この者、年ごろ定かならぬ名所を考へ置はべればとて、一日案内す。

宮城野の萩茂り合ひて、秋の気色思ひやらるる。

玉田・横野・躑躅が岡はあせび咲ころなり。

日影も漏らぬ松の林に入りて、ここを木の下といふとぞ。

昔もかく露深ければこそ、「みさぶらひみかさ」とはよみたれ。

薬師堂・天神の御社など拝て、その日は暮れぬ。

なお、松嶋・塩竈の所々、画に書て贈る。

かつ、紺の染緒付けたる草鞋二足餞す。

さればこそ風流のしれ者、ここに至りてその実を顕す。

あやめ草　足に結ばん　草鞋の緒

かの画図にまかせてたどり行ば、奥の細道の山際に十符の菅あり。

今も年々十符の菅菰を調へて国守に献ずといへり。

17　壷の碑

壷碑　市川村多賀城にあり。

つぼの石ぶみは高サ六尺余、横三尺ばかりか。

苔を穿ちて文字幽かなり。

四維国界の数里をしるす。

「この城、神亀元年、按察使鎮守府将軍大野朝臣東人之所里也。天平宝字六年参議東海東山節度使同将軍恵美朝臣修造而、十二月朔日」とあり。

聖武皇帝の御時に当れり。

昔よりよみ置ける哥枕、多く語り伝ふといへども、山崩れ川流て道改まり、石は埋て土に隠れ、木は老て若木に代はれば、時移り代変じて、その跡たしかならぬことのみを、ここに至りて疑ひなき千歳の記念、今眼前に古人の心を閲す。

行脚の一徳、存命の喜び、羈旅の労を忘れて、涙も落つるばかりなり。

18　末の松山・塩竈

それより野田の玉川・沖の石を尋ぬ。

末の松山は寺を造りて末松山といふ。

松の間々皆墓原にて、翼を交はし枝を連ぬる契りの末も、つひにはかくのごときと、悲しさもまさりて、塩竈の浦に入相の鐘を聞く。

五月雨の空いささか晴れて、夕月夜幽かに、籬が嶋もほど近し。

蜑の小舟漕ぎ連れて、肴分かつ声々に、「綱手かなしも」とよみけむ心もしられて、いとどあはれなり。

その夜、目盲法師の琵琶を鳴らして奥浄瑠璃といふものを語る。

平家にもあらず、舞にもあらず。

ひなびたる調子うち上げて、枕近うかしましけれど、さすがに辺土の遺風忘れざるものから、殊勝におぼえられる。

早朝塩竈の明神に詣づ。

国守再興せられて、宮柱ふとしく彩椽きらびやかに、石の階九仞に重なり、朝日朱の玉垣をかかやかす。

かかる道の果、塵土の境まで、神霊あらたにましますこそ、吾国の風俗なれと、いと貴けれ。

神前に古き宝燈あり。

鉄の扉の面に「文治三年和泉三郎寄進」とあり。

五百年来の俤、今目の前に浮かびて、そぞろに珍し。

かれは勇義忠孝の士なり。

佳命今に至りて慕はずといふことなし。

まことに「人よく道を勤、義を守るべし。

名もまたこれに従ふ」といへり。

日すでに午に近し。

船を借りて松嶋に渡る。

その間二里余、雄嶋の磯に着く。

19　松島

そもそもことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、およそ洞庭・西湖を恥ぢず。

東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮を湛ふ。

島々の数を尽くして、欹つものは天を指さし、伏すものは波に匍匐ふ。

あるは二重に重なり、三重に畳みて、左に分かれ右に連なる。負へるあり抱けるあり、児孫愛すがごとし。

松の緑こまやかに、枝葉潮風に吹きたわめて、屈曲おのづから矯たるがごとし。

その気色、窅然として美人の顔を粧ふ。

ちはやぶる神の昔、大山祇のなせるわざにや。

造化の天工、いづれの人か筆をふるひ、詞を尽くさむ。

雄島が磯は地続きて海に出でたる島なり。

雲居禅師の別室の跡、坐禅石などあり。

はた、松の木陰に世をいとふ人もまれまれ見えはべりて、落穂・松笠などうち煙りたる草の庵、閑に住なし、いかなる人とは知られずながら、まずなつかしく立ち寄ほどに、月海に映りて、昼の眺めまた改む。

江上に帰りて宿を求むれば、窓を開き二階を作りて、風雲の中に旅寝するこそ、あやしきまで、妙なる心地はせらるれ。

松島や　鶴に身を借れ　ほととぎす　曽良

予は口を閉ぢて眠らんとしていねられず。

旧庵を別るる時、素堂松島の詩あり。

原安適松が浦島の和歌を贈らる。

袋を解きて、こよひの友とす。

かつ、杉風・濁子が発句あり。

20　瑞巌寺

十一日、瑞岩寺に詣づ。

当寺三十二世の昔、真壁の平四郎出家して入唐、帰朝の後開山す。

その後に雲居禅師の徳化によりて、七堂甍改まりて、金壁荘厳光をかかやかし、仏土成就の大伽藍とはなれりける。

かの見仏聖の寺はいづくにやと慕はる。

21　石の巻

十二日、平泉と志し、姉歯の松・緒絶の橋など聞き伝へて、人跡まれに雉兎蒭蕘の行きかふ道そことも分かず、ついに道踏みたがへて、石の巻といふ港に出づ。

「こがね花咲く」とよみて奉りたる金花山、海上に見わたし、数百の廻船入江につどひ、人家地をあらそひて、竈の煙立ち続けたり。

思ひがけずかかる所にも来たれるかなと、宿借らんとすれど、さらに宿貸す人なし。

やうやうまどしき小家に一夜を明かして、明ればまた知らぬ道まよひ行く。

袖の渡り・尾ぶちの牧・真野の萱原などよそ目に見て、遥かなる堤を行く。

心細き長沼に添うて、戸伊摩といふ所に一宿して、平泉に到る。

その間二十余里ほどとおぼゆ。

22　平泉

三代の栄耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。

まず、高館に登れば、北上川南部より流るる大河なり。衣川は、和泉が城を巡りて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡らが旧跡は、衣が関を隔てて、南部口をさし固め、夷を防ぐと見えたり。

さても義臣すぐつてこの城にこもり、功名一時の叢となる。

「国破れて山河あり、城春にして草青みたりと」、笠うち敷きて、時の移るまで涙を落としはべりぬ。

夏草や　兵どもが　夢の跡

卯の花に　兼房見ゆる　白毛かな　曽良

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。

経堂は三将の像を残し、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。

七宝散り失せて、珠の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、すでに頽廃空虚の叢となるべきを、四面新たに囲みて、甍を覆ひて雨風を凌ぎ。

しばらく千歳の記念とはなれり。

五月雨の　降り残してや　光堂

23　尿前の関

南部道遥かに見やりて、岩手の里に泊る。

小黒崎・みづの小島を過ぎて、鳴子の湯より尿前の関にかかりて、出羽の国に越えんとす。

この道旅人まれなる所なれば、関守に怪しめられて、やうやうとして関を越す。

大山を登つて日すでに暮ければ、封人の家を見かけて宿りを求む。

三日風雨荒れて、よしなき山中に逗留す。

蚤虱　馬の尿する　枕もと

あるじのいはく、これより出羽の国に大山を隔てて、道定かならざれば、道しるべの人を頼みて越べきよしを申す。

さらばといいて人を頼みはべれば、究境の若者、反脇指を横たへ、樫の杖を携へて、われわれが先に立ちて行く。

今日こそ必ず危きめにもあふべき日なれと、辛き思ひをなして後に付いて行く。

あるじのいふにたがはず、高山森々として一鳥声聞かず、木の下闇茂り合ひて夜行くがごとし。

雲端につちふる心地して、篠の中踏み分け踏み分け、水を渡り岩に躓いて、肌に冷たき汗を流して、最上の庄に出づ。

かの案内せし男のいふやう、「この道必ず不用のことあり。恙なう送りまゐらせて仕合はせしたり」と、喜びて別れぬ。

跡に聞きてさへ胸とどろくのみなり。

24　尾花沢

尾花沢にて清風といふ者を尋ぬ。

かれは富る者なれども、志卑しからず。

都にもをりを通ひて、さすがに旅の情をも知たれば、日ごろとどめて、長途のいたはり、さまざまにもてなしはべる。

涼しさを　わが宿にして　ねまるなり

這ひ出でよ　飼屋が下の　蟾の声

眉掃きを　俤にして　紅粉の花

蚕飼ひする　人は古代の　姿かな　曽良

25　立石寺

山形領に立石寺といふ山寺あり。

慈覚大師の開基にして、殊に清閑の地なり。

一見すべきよし、人々の勧むるによりて、尾花沢よりとつて返し、その間七里ばかりなり。

日いまだ暮ず。

麓の坊に宿借り置きて、山上の堂に登る。

岩に巌を重ねて山とし、松栢年旧り土石老いて苔滑らかに、岩上の院々扉を閉ぢて物の音聞こえず。

岸を巡り岩を這て仏閣を拝し、佳景寂寞として心澄みゆくのみおぼゆ。

閑かさや　岩にしみ入る　蝉の声

26　最上川

最上川乗らんと、大石田といふ所に日和を待つ。

ここに古き誹諧の種こぼれて、忘れぬ花の昔を慕ひ、芦角一声の心をやはらげ、この道にさぐり足して、新古二道に踏み迷ふといへども、道しるべする人しなければと、わりなき一巻残しぬ。

このたびの風流ここに至れり。

最上川は陸奥より出でて、山形を水上とす。

碁点・隼などいふ、恐ろしき難所あり。

板敷山の北を流れて、果は酒田の海に入る。

左右山覆ひ、茂みの中に船を下す。

これに稲積みたるをや、稲船といふならし。

白糸の滝は青葉の隙々に落て仙人堂岸に臨みて立つ。

水みなぎつて舟危し。

五月雨を　集めて早し　最上川

27　出羽三山

六月三日、羽黒山に登る。

図司左吉といふ者を尋ねて、別当代会覚阿闍利に謁す。

南谷の別院に宿して憐愍の情こまやかにあるじせらる。

四日、本坊において誹諧興行。

ありがたや　雪をかをらす　南谷

五日、権現に詣づ。

当山開闢能除大師はいづれの代の人といふことを知らず。

延喜式に「羽州里山の神社」とあり。

書写、「黒」の字を「里山」となせるにや。

羽州黒山を中略して羽黒山といふにや。

出羽といへるは、「鳥の毛羽をこの国の貢に献る」と風土記にはべるとやらん。

月山・湯殿を合はせて三山とす。

当寺武江東叡に属して天台止観の月明らかに、円頓融通の法の灯かかげそひて、僧坊棟を並べ、修験行法を励まし、霊山霊地の験効、人貴びかつ恐る。

繁栄長にして、めでたき御山と謂つつべし。

八日、月山に登る。

木綿しめ身に引きかけ、宝冠に頭を包み、強力といふものに道びかれて、雲霧山気の中に氷雪を踏て登ること八里、さらに日月行道の雲関に入るかと怪しまれ、息絶身凍えて頂上に至れば、日没て月顕はる。

笹を鋪、篠を枕として、臥て明くるを待つ。

日出でて雲消ゆれば湯殿に下る。

谷のかたはらに鍛治小屋といふあり。

この国の鍛治、霊水を撰びてここに潔斎して劔を打ち、ついに月山と銘を切つて世に賞せらる。

かの龍泉に剣を淬ぐとかや。

干将・莫耶の昔を慕ふ。

道に堪能の執浅からぬこと知られたり。

岩に腰掛けてしばし休らふほど、三尺ばかりなる桜のつぼみ半ば開けるあり。

ふり積雪の下に埋もれて、春を忘れぬ遅桜の花の心わりなし。

炎天の梅花ここにかをるがごとし。

行尊僧正の哥のあはれもここに思ひ出でて、なほまさりておぼゆ。

総じてこの山中の微細、行者の法式として他言することを禁ず。

よつて筆をとどめてしるさず。

坊に帰れば、阿闍利の求めによりて、三山順礼の句々短冊に書く。

涼しさや　ほの三日月の　羽黒山

雲の峯　いくつ崩れて　月の山

語られぬ　湯殿にぬらす　袂かな

湯殿山　銭踏む道の　涙かな　曽良

28　酒田

羽黒を立ちて、鶴が岡の城下、長山氏重行といふ武士の家に迎へられて、誹諧一巻あり。

左吉もともにに送りぬ。

川舟に乗つて酒田の港に下る。

淵庵不玉といふ医師の許を宿とす。

あつみ山や　吹浦かけて　夕涼み

暑き日を　海に入れたり　最上川

29　象潟

江山水陸の風光数を尽くして、今象潟に方寸を責む。

酒田の港より東北のかた、山を超え磯を伝ひ、いさごを踏みて、その際十里、日影やや傾くころ、汐風真砂を吹き上げ、雨朦朧として鳥海の山隠る。

闇中に莫作して、「雨もまた奇なり」とせば、雨後の晴色またたのもしきと、蜑の苫屋に膝を入れて雨の晴るるを待つ。

その朝、天よく霽れて、朝日はなやかにさし出づるほどに、象潟に舟を浮かぶ。

まず能因島に舟を寄せて、三年幽居の跡を訪ひ、向かうの岸に舟を上がれば、「花の上漕ぐ」とよまれし桜の老木、西行法師の記念を残す。

江上に御陵あり。

神功后宮の御墓といふ。

寺を干満珠寺といふ。

この所に行幸ありしことといまだ聞かず。

いかなることにや。

この寺の方丈に座して簾を捲けば、風景一眼の中に尽きて、南に鳥海　天をささへ、その陰映りて江にあり。

西はむやむやの関、通を限り、東に堤を築きて秋田に通ふ道遥かに、海北にかまへて浪うち入るる所を汐越といふ。

江の縦横一里ばかり、俤松島に通ひてまた異なり。

松島は笑ふがごとく、象潟は憾むがごとし。

寂しさに悲しみを加へて、地勢魂を悩ますに似たり。

象潟や　雨に西施が　ねぶの花

汐越や　鶴脛ぬれて　海涼し

祭礼

象潟や　料理何食ふ　神祭　曽良

蜑の家や　戸板を敷きて　夕涼み

美濃の国の商人　低耳

岩上に　雎鳩の巣を見る

波越えぬ　契りありてや　雎鳩の巣　曽良

30　越後路

酒田のなごり日を重ねて、北陸道の雲に望む、遙々の思ひ胸をいたましめて加賀の府まで百三十里と聞く。鼠の関を越ゆれば、越後の地に歩行を改めて、越中の国市振の関に至る。

この間九日、暑湿の労に神を悩まし、病おこりて事をしるさず。

文月や　六日も常の　夜には似ず

荒海や　佐渡に横たふ　天の河

31　市振

今日は親知らず子知らず・犬戻り・駒返しなどいふ北国一の難所を越えて疲れはべれば、枕引き寄せて寐たるに、一間隔てて面のかたに若き女の声、ふたりばかりと聞こゆ。年老いたる男の声も交じりて物語するを聞けば、越後の国新潟といふ所の遊女なりし。

伊勢参宮するとて、この関まで男の送りて、明日は古郷に返す文したためて、はかなき言伝などしやるなり。

白浪の寄する汀に身をはふらかし、海士のこの世をあさましう下りて、定めなき契り、日々の業因いかにつたなしと、物いふを聞く聞く寝入りて、朝旅立つに、われわれに向かひて、「行方しらぬ旅路の憂さ、あまりおぼつかなう悲しくはべれば、見え隠れにも御跡を慕ひはべらん。衣の上の御情に、大慈の恵みを垂れて結縁せさせたまへ」と涙を落とす。

不便のことにははべれども、「われわれは所々にてとどまるかた多し。ただ人の行くにまかせて行くべし。神明の加護、必ず恙なかるべし」といひ捨て出でつつ、あわれさしばらくやまざりけらし。

一つ家に　遊女も寝たり　萩と月

曽良に語れば、書とどめはべる。

32　越中路

黒部四十八が瀬とかや、数知ぬ川を渡りて、那古といふ浦に出づ。

担籠の藤浪は春ならずとも、初秋のあはれ、訪ふべきものをと人に尋ぬれば、「これより五里磯伝ひして、向かふの山陰に入り、蜑の苫葺かすかなれば、蘆の一夜の宿貸すものあるまじ」と、いひをどされて、加賀の国に入る。

早稲の香や　分け入る右は　有磯海

33　金沢

卯の花山・倶利伽羅が谷を越えて、金沢は七月中の五日なり。ここに大坂より通ふ商人、何処といふ者あり。それが旅宿をともにす。

一笑といふ者は、この道に好ける名のほのぼの聞えて、世に知る人もはべりしに、去年の冬、早世したりとて、その兄追善を催すに。

塚も動け　わが泣く声は　秋の風

ある草庵にいざなはれて

秋涼し　手ごとにむけや　瓜茄子

途中吟

あかあかと　日はつれなくも　秋の風

小松といふ所にて

しほらしき　名や小松吹く　萩薄

34　多太神社

この所多太の神社に詣づ。

真盛が甲・錦の切れあり。

往昔源氏に属せし時、義朝公より、賜はらせたまふとかや。

げにも平士のものにあらず。

目庇より吹返しまで、菊唐草のほりもの金をちりばめ、龍頭に鍬形打ったり。

真盛討死の後、木曽義仲願状に添へて、この社にこめられはべるよし、樋口の次郎が使ひせしことども、まのあたり縁記に見えたり。

むざんやな　甲の下の　きりぎりす

35　那谷

山中の温泉に行くほど、白根が岳跡に見なして歩む。

左の山際に観音堂あり。

花山の法皇三十三所の巡礼とげさせたまひて後、大慈大悲の像を安置したまひて、那谷と名付たまふとや。

那智・谷汲の二字を分かちはべりしとぞ。

奇石さまざまに、古松植ゑ並べて、萱葺きの小堂岩の上に造り掛けて、殊勝の土地なり。

石山の　石より白し　秋の風

36　山中

温泉に浴す。

その功有明に次ぐといふ。

山中や　菊はたをらぬ　湯の匂ひ

あるじとする者は、久米之助とていまだ小童なり。

かれが父、誹諧を好み、洛の貞室若輩の昔、ここに来たりしころ、風雅に辱しめられて、洛に帰て貞徳の門人となつて世に知らる。

功名の後、この一村　判詞の料を請けずといふ。

今更昔語とはなりぬ。

37　別離

曽良は腹を病て、伊勢の国長島といふ所にゆかりあれば、先立て行くに、

行き行きて　倒れ伏すとも　萩の原　曽良

と書き置きたり。

行く者の悲しみ、残る者の憾み、隻鳧の別れて雲に迷ふがごとし。

予もまた、

今日よりや　書付消さん　笠の露

38　全昌寺

大聖持の城外、全昌寺といふ寺に泊まる。

なほ加賀の地なり。

曽良も前の夜、この寺に泊まりて、

よもすがら　秋風聞くや　裏の山

と残す。

一夜の隔て、千里に同じ。

われも秋風を聞きて衆寮に臥せば、あけぼのの空近う、読経声澄むままに、鐘板鳴りて食堂に入る。

今日は越前の国へと、心早卒にして堂下に下るを、若き僧ども紙硯をかかへ、階の下まで追ひ来る。

をりふし庭中の柳散れば、

庭掃きて　出でばや寺に　散る柳

とりあへぬさまして草鞋ながら書き捨つ。

39　汐越の松

越前の境、吉崎の入江を舟に棹して汐越の松を尋ぬ。

よもすがら嵐に波を運ばせて、月を垂れたる汐越の松

西行

この一首にて数景尽きたり。

もし一辨を加ふるものは、無用の指を立つるがごとし。

40　天龍寺・永平寺

丸岡天龍寺の長老、古き因あれば尋ぬ。

また、金沢の北枝といふ者、かりそめに見送りて、この所まで慕ひ来たる。

所々の風景過ぐさず思ひ続けて、をりふしあはれなる作意など聞こゆ。

今すでに別れに臨みて、

物書きて　扇引きさく　なごりかな

五十丁山に入りて永平寺を礼す。

道元禅師の御寺なり。

邦畿千里を避けて、かかる山陰に跡を残したまふも、貴きゆゑありとかや。

41　福井

福井は三里ばかりなれば、夕飯したためて出づるに、黄昏の道たどたどし。

ここに等栽といふ古き隠士あり。

いづれの年にか江戸に来たりて予を尋ぬ。

遥か十年余りなり。

いかに老いさらぼひてあるにや、はた死けるにやと人に尋ねはべれば、いまだ存命してそこそこと教ふ。

市中ひそかに引き入りて、あやしの小家に夕顔・へちまの延へかかりて、鶏頭・箒木に戸ぼそを隠す。

さてはこの内にこそと門をたたけば、侘しげなる女の出でて、

「いづくよりわたりたまふ道心の御坊にや。

あるじはこのあたり何某といふ者のかたに行きぬ。

もし用あらば尋ねたまへ」といふ。

かれが妻なるべしと知らる。

昔物語にこそかかる風情ははべれと、やがて尋ね会ひて、その家に二夜泊まりて、名月は敦賀の港にと旅立つ。

等栽もともに送らんと、裾をかしうからげて、道の枝折りと浮かれ立つ。

42　敦賀

やうやう白根が岳隠れて、比那が嵩現はる。

あさむづの橋を渡りて、玉江の蘆は穂に出でにけり。

鶯の関を過ぎて湯尾峠を越ゆれば、燧が城、帰山に初鴈を聞きて、十四日の夕暮れ、敦賀の津に宿を求む。

その夜、月殊に晴れたり。

「あすの夜もかくあるべきにや」といへば、「越路の習ひ、なお明夜の陰晴はかりがたし」と、あるじに酒勧められて、氣比の明神に夜参す。

仲哀天皇の御廟なり。

社頭神さびて、松の木の間に月の漏り入たる、御前の白砂霜を敷けるがごとし。

往昔遊行二世の上人、大願発起のことありて、自ら草を刈り、土石を荷ひ、泥濘をかはかせて、参詣往来の煩ひなし。

古例今に絶えず。

神前に真砂を荷ひたまふ。

これを遊行の砂持ちと申しはべる　と亭主の語りける。

月清し　遊行の持てる　砂の上

十五日、亭主のことばにたがはず雨降る。

名月や　北国日和　定めなき

43　種の浜

十六日、空霽れたれば、ますほの小貝拾はんと種の浜に舟を走す。

海上七里あり。

天屋何某といふ者、破籠・小竹筒など、こまやかにしたためさせ、僕あまた舟にとり乗せて、追ひ風時のまに吹き着きぬ。

浜はわづかなる海士の小家にて、侘しき法華寺あり。

ここに茶を飲、酒を暖めて、夕暮れの寂しさ感に堪へたり。

寂しさや　須磨に勝ちたる　浜の秋

波の間や　小貝にまじる　萩の塵

その日のあらまし、等栽に筆をとらせて寺に残す。

44　大垣

露通もこの港まで出で迎ひて、美濃の国へと伴ふ。駒に助けられて大垣の庄に入れば、曽良も伊勢より来り合ひ、越人も馬を飛ばせて、如行が家に入り集まる。前川子・荊口父子、その外親しき人々日夜訪ひて、蘇生の者に会ふがごとく、かつ喜び、かついたはる。旅のものうさも、いまだやまざるに、長月六日になれば、伊勢の遷宮拝まんと、また舟に乗りて。

蛤の　ふたみに別れ　行く秋ぞ